Q＆C　これが俺の学園生活！！

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｑ＆Ｃ　これが俺の学園生活！！

【Ｎコード】
Ｎ２９３７ＢＡ

【作者名】
ちゃんこう

【あらすじ】
ケンカをしまくって男子校ですら手におえない存在になってしまった城東（じょうとう）　拓己（たくみ）。しかし、拓己の父親はどうにかして、高校くらいは卒業させてやりたいと思って知り合いの高校に強制的に転入させた。
そこで、巻き起こる波乱万丈の魔法学園生活。
この小説は視点を変えながら書いていきますのでご了承ください
なお、誰視点かは、前書きの部分に書いておきますので

プロローグ（前書き）

今回は、城東（じょうとう）　拓巳（たくみ）視点です！！

プロローグ

「はあ～～～～やっちまった」

俺の名前は城東拓巳（じょうとうたくみ）

ただいま、ケンカ真っ最中です？

「おら！！城東！！殺してやるよ！！！」

「待て！！俺がやるんだ！！」

「おいおい！！俺が！！！」

ついでに、囲まれています？

はあ、カツアゲされている子を助けただけでこんなことになるとは・・・

時は、ほんの１時間前にさかのぼる

――――１時間前

はあ、今月どうしよう・・・

俺は町を歩きながらそんなことを考えていた

なぜ、今月どうしようなのか・・・なぜなら、ちょっと前に気に入っているバンドのＣＤが出て金を使い果たしてしまった

おかげで、まだ半分も日にちが残っているのに、１００円で生き残らないといけない

「やっちまった・・・」

ポケットにチェーンでつながれている財布は、無駄にでかく、そして軽い

親父からまた、仕送りをしてもらうことも可能だけど、それじゃあなんかいやだからそれは最終手段
他の道を探さないとな・・・
そう思いながら駅に向かった

【駅】

・・・どうやって帰ればいいんだろう
切符売り場についてから気が付いた
金がないため、切符を変えないことに！！

「チクショウ！！」

人が大勢いるのに、叫んでしまった
みんな俺のことを見ている

「す、すみません」

平謝りしながらその場所を離れる
恥ずかしい・・・顔を隠しながらトイレに駆け込んだら・・・
・・・タイミングが悪かった

「おいおい、ここは立ち入り禁止だぜ？」

一目でわかるほどの不良がいる
数は5人ほどだ。しかし、全員バッドなどを持っている
中にはナイフを持っている奴もいる
・・・まあ、ここらじゃ普通だな
俺の通っている男子校は、基本的には不良・・・いや、俺以外全員が小学校のころに犯罪の何かをやっているちょっと特殊な学校だ

ついでに、俺がこの学校を通っている理由はケンカのやりすぎで強制的に通わされている
個人的には、近くの高校に行きたかった

「おい！！無視してんじゃねえよ！！」

――ブン！！

威嚇程度に振り回している
はあ、ここはおとなしく言うことを聞いて逃げるか
そう思った時だった

「た・・す・・けて・・・・」
「しゃべんな！！」

――――ゴス！！

奥の方で何かが聞こえた
小さいが「助けて」と・・・・
・・・はあ、仕方ねえな

「おい！！てめえもこいつ見てえになりてえのか！？」

不良の一人がトイレの個室から誰かを連れてくる
そいちは、助けてと言ったやつではない。なぜなら、助けてって言ったのは子供みたいだったけど、引きずられているのは警官
あおい服を着た警官だ。しかし、もっているはずの拳銃や手錠はない
いや、よくよく見ると、その警官の手の方に手錠がかかっている
・・・こいつら・・・

「ほら！！わかったら、さっさと・・・・」
「うっせぇ」
「ああ？」
「うっせぇって言ってんだよ！！」

———ドッガ！！

「ふっぐ！！」

右手で思いっきり殴りつけた
殴られた不良はそのまま吹っ飛び・・・気絶した

「てめえ！！」
「邪魔だ！！」

1人、また1人とリズムよく殴ってたり蹴ったりして倒していく
そして、残るは・・・1人リーダーみたいなやつが残った

「てめえ、何者だ？」
「だれでもいいだろ？」

俺はそう言いながら距離をつめた
相手は拳銃を持っている可能性がある。いや、確実にもっているはずだ。なら・・・

「これで死ね！！」

どこからか、拳銃を引き抜き、俺へと向ける
だけど、俺はその対処の仕方を知っている

「おらよ！！」

———ゴッ！！

「あ・・・が」

俺の鉄拳が相手の腹にめりこんだ
相手は目を見開いて、倒れていく
・・・拳銃の対処の仕方は簡単だ、撃たなかったらただの鉄の塊。
撃たれる前に倒す・・・それが俺の常識だ

「う・・・だれ・・？」

一番奥のトイレの個室の少年がいた
目隠しをされている
どうやら、カツアゲにあっていたみたいだ
顔はちょっと膨れ上がっている
・・たく、こいつら子供までやるのかよ
多分こいつらはうちの学校のやつらだ
警察が全く怖くないところがある意味うちの学校の特色だからな
はあ、全員一回は倒したと思ったんだけどな

「大丈夫か？もう、安心しろ」

そう言いながら、目隠しをとる
俺の目をじっと見つめている
自分がどういう状況になったか、まだわかっていないんだろう

「う・・・うあああん！！！！！」

泣き出した！！
しまった！！子供が泣くのは苦手なんだよ！！

「ほらほら、大丈夫、大丈夫」

背中を叩きながら慰める
ああもう！！どうしよう！！
警官は伸びているし、不良どもも伸びている
この状況で、警官が来たらまた、誤解され・・・

「いたぞ！！あいつだ！！」

うそだーーーーー！！！
警官！？
そう思いながら振り返った
そこには・・・

「てめえが、俺の仲間をやったんだな？」

うわーーーーい。不良のお仲間さんが増えたよ

「いえいえ、わたくしではありません」
「ウソつけ！！！」

――――ビリビリビリ！！

・・・？
今、なんかおかしな音聞こえなかったか？
スタンガンのような・・・

「おら！！」
「うわ！！」

間一髪、突き出してくるものを避ける
そして、突き出してきた物は・・・スタンガン！！
しかも、多分出力を最大にしている！！
あんなもんくらったさすがにやばい！！
ここは・・・

「逃げるに限る！！」

俺は少年を抱いて逃げた！
幸いのも、出入り口までは簡単に行けて、１人だけ蹴り飛ばすだけでトイレから逃げ出すことができた
だが！！！

「いたぞ！！あいつだ！！」
「ああ、メールに書いてあった通りの服でガキを連れている！！」

連絡網、早！！！
トイレから出て、子供を抱きながら公園に逃げ込む

【公園】

「はあはあ・・・ここまでくればいいだろ」
「お兄ちゃん？大丈夫？」

目に涙をためながら、俺に聞いてくる

「お兄ちゃんじゃない、拓巳だ」

「たくみ？」
「そう、俺のことは拓巳って言え」
「うん！！」

元気のいい声で返してくる
・・・そう言えば・・・

「お前、名前は？」
「僕の名前は木場俊（こばしゅん）！！」
「・・・え？」

こ・・・木場！？
俺の学校で弟がいるってやつを知っている
そいつの名前は木場　虎太郎（こたろう）
俺の次にケンカが強いやつだ
男子校ではそいつが、仕切っているが・・・
なるほどな・・・虎太郎を連れ出すためにこの子を誘拐したのか

「じゃあ、俊。家どこかわかるか？」
「自分の家？」
「そうだ」
「えっと・・・男子校の近くなんだけど・・・」
「そうか」

男子校の近くってことは、ここから４駅ほどの場所
遠いんだよ！！！
そう、心の中で叫んだ
はあ、叫んでも仕方ねえ。連れて行ってやるか。こいつの兄貴に俺は目つけられているけど
考えている時だった

「さて・・・ここがてめえらの墓場でいいか？」
・・・・やっぱりか・・・・囲まれている
数は・・・・１２，３人。少ないな
「一応、遺言ぐれえは聞いてやるよ」
「そうか・・・・なら・・・・」
――――すううう
俺は大きく息を吸った
そして、言った
「虎太郎！！！俊はここだーーーーーー！！！！！」
・・・・で、駆けつけた虎太郎たちが、俺が誘拐したと勘違いして・・・・
今に至る
「俊を返せ！！！」
「返したいけど！！！俊が離れないんだよ！！！」
がっちりと俺の服を掴んでいて俺１人じゃ引き離せない
虎太郎が誤解ってことをわかってくれたらいいんだけど
今、頭に血が上っているみたいだから何言っても聞いてくれねえ
むしろ、本当に誘拐したやつと仲間になって一緒に囲んでいるし
「くそ、なんでこうなっただよ」

自分の不甲斐なさに涙が出る
・・・泣いていてもしょうがないな
やるしかない・・・俊を抱きながら！！
「うおおおおおお！！！！！！」

プロローグ（後書き）

この小説でよくわからない表現などがあったら、気軽に感想の部分に書いてください。できるだけ早く返事します

第一話（前書き）

今回は、城東拓己（じょうとうたくみ）視点です

第一話

あれから、一か月・・・誤解などは解けてはれて虎太郎と友達になったが・・・

「城東拓巳(じょうとうたくみ)君。君を退学にしまう」

・・・え？

いつも通りの日々を送っていた俺に突然の退学処分

嘘だ・・・と叫びたかったけど、いつも通りが駄目だった

だって、ケンカ、ケンカ、ケンカ、ケンカ時々、ナンパなどの完全に不良の生活を送っていた

しかも、なんどか警察を呼ぶことになって、それとも意見がぶつかりケンカになったし・・・

「わかりました。じゃあ、実家に帰ります」

「いや、待ちたまえ」

「え？」

退学処分になった俺に何か用があるのか？この人・・・

「実はな、君を転入させたいという校長がいるんだ」

「あ～～、断っといてください。俺、高校生活疲れましたので」

実際のところ、体力だけは取り柄だから、体力のいるバイトをしながら就活をすれば、何とかなるだろう

「君のお父さんが、転入させてくれって言っているんだが・・・」

「・・・親父が？」

めずらしい、あの親父が俺の危機に駆けつけてくれるとは・・・隠しているのに

「だから、来月の・・・ちょうど四月だね、４月の６日からそこの学校に通ってくれ」

静かにプリントを渡してきた

・・へえ、俺の実家から結構近いところか

なら、どっか借りないといけないな

待てよ・・・

「ここの寮っていつまでですか？」

「いや、君はここの学校は退学なので寮はもう使えない」

「じゃあ、どうすれば・・・」

「・・・・・」

静かに、校長は茶をすする

あとは、自分で何とかしろってことか

「わかりました。今までありがとうございました」

一応、お辞儀をして礼を言う

なんだかんだでこの人も俺のことよく庇ってくれた

だからこそ、礼を言っておく

そして、俺はこの男子校を出た

【空外（そらそと）駅】

「あ～～～やっぱ地元が一番かもな」

久々に地元に帰った俺は、軽く体を伸ばす
なにせ、ここに帰ってきたのは、４年ぶりくらいだ。中学のころにあっちに送られたからな
さて・・・俺の残り代金、３０万円・・・どこ借りようかな？
できれば、学校に近い方がいいんだけど・・・
そう考えている時だった

「泥棒～～～！！！」

――――ブゥゥーーン

こっちにバイクが向かってくる
・・・泥棒？

――――――ドッガ！！

「あ・・・・っが・・・」

反応が遅れた！！
俺の体はバイクと衝突し・・・吹っ飛ばされ、壁にぶつかった
・・・っち！！帰ってすぐこれかよ！！
俺はすぐに立ち上がり、バイクを見る
俺にぶつかったせいか、こけていてバイクを捨てて走っている
ラッキー！！
俺は走り出した途端、体に異変を感じた
どうやら、右腕が折れてしまっているようだ
・・・まあ、バイクにはねられて腕一本だったら大丈夫なほうか

そう思い長ながら俺を跳ね飛ばした、やつに追いつき

「待て！！」

左手で、肩を掴んだ

「ッヒ！！バケモノ！！」

「だれが！！バケモノだ！！」

そう言いながら、得意技のかかと落し

見事にその技がきまり、強盗犯は地面とキスをして、気絶した

その瞬間・・・痛みが走ってきた

「ウガア！！イ、いてぇ・・・」

「だ、大丈夫ですか？」

女の子が近いよって来た

そして、なぜか俺の足に力がはいらなくなって行き・・・最終的には倒れた

「え・・え・・・？どうして、どうしてぇーーー！！？」

「あ～～すまねえけど、タクシーかなにか呼んでくれ。歩けねえ」

「わ、わかりました！あ！！いいところに・・」

どうやら、見つけてくれたようだ・・・あ、やばい。気が遠くなって・・・

「おい・・・どういうことになっているんだ？これは・・・」

「先生！！実は・・・」

【？？？】

「あ・・・」

「気が付いた！！」

・・・ああ、そうだ。気絶したんだっけな俺・・・

なさけねえ

「ここどこだ？」

そう聞きながら、俺は右手で布団を押しのける

・・・あれ？なにかおかしくないか？

「ここは、天神学園の保健室」

「天神学園・・・ああ、俺が転入するはずの場所か」

俺は自分のカバンを探しだし、プリントを見て確認した

右手の人差し指でゆっくりと確認していく・・・うん、やっぱりそうだ

そして、またなにかひかっかった

「へぇ、転入生なんだ。めずらしいね」

「まあな」

「じゃあ、話してもいいかな」

「何をだ？」

「あ、やっぱり気づいてなかったんだ。右手」

「右手・・？」

右手がどうかしたのか？
右手が・・・右手が・・・

「そういや、折れてなかったけ？俺の右腕」
「うん、ばっちし右腕複雑骨折で本来ならもう戻らないほどの怪我なんだけど」
「なんで俺、右手が使えるんだ？」

右腕が折れているなら右手が使えないはずなのに・・・

「魔法で治してもらったよ」
「魔法？・・・そうか、魔法か」

そうだな、魔法なら治せるな・・・って

「治るか！！！」
「きゃ！」
「おかしいだろ、今の世で魔法なんて」

魔法なんてファンタジーなのは子供のころに卒業した

「え？ええ？この学園の転入生なんだよね？」
「ああ、間違いない」
「おかしいな？この学園じゃ魔法使えるのは普通なのに・・・」

どんな普通だよ

「おお、気が付いたか」
「先生」

保健室のドアの方からスーツを着ている先生が入ってきた
誰だ？この人・・・

「先生。ちょっと聞いてください」
「なんだ？」
「この人、この学園に転入してきたのに、魔法知らないんです」
「転入？聞いてないぞ？」

おいおいおいおい、わけのわからないことになってきたぞ

「校長に聞いてくれないか？俺もちょっと混乱してきた」
「そうだな・・・でも、その前に・・・」
「？」
「マジックバイス」

スーツを着た先生の手から光が現れて、何かの魔法陣を描きだした
そして、それから野球ボールみたいなデカさの物体が現れて・・・

―――ゴン！！

「ベッフ！！」

俺に思いっきり当たり、また布団に倒れた
そして、変な声が出た
「ベッフ」ってなんだよ「ベッフ」って
そう思いながら体を起こそうとすると・・・

「あれ？」

起き上がれない・・・なぜだ？

「ちょっと、そのままで寝ててくれ」
「おい！何をするつもりだ！」
「ああ？確認すんだよ。シードかを」

シード？しーど・・・ｓｅｅｄ？
種？どういうことだ？
そう思い考えている時だった

―――ビリッ！！

オレノフクヲコノキョウシガヒキサイタ
・・・ぎゃあああああ！！！！！
俺は思わずこの教師をぶっ飛ばした！

―――パン！

「ッグ！！何を・・・」
「うるせえ！！この変態！！」

俺は引き裂かれた服で胸を隠しながら言った
・・・いや、ホモとかそう言うのじゃないけど、なんか知らない間に隠していた

「おいおい、背中見るだけだぞ？」
「なんで！！前から！！見る！！！」
「見たいからだ！！！」

うわ・・・堂々と変態発言したぞこの人・・・

「死ね！！！」

――――ドガ！！

発するとともに蹴り飛ばしたっが・・・

「ふっ！甘いな・・・」

「まだまだ！！！」

蹴りを簡単に受け止められた。こんなことは久しぶりだ。強い・・・

そんなことを考えながら反対側の足でまた蹴った

――――ドッガ！！！

「へッブ！！！」

「へ？」

今度も受けとめられると思ったから加減はなしで蹴った

そしてら、いつも通り・・・気絶してしまった

どうやら、あごに当たったみたいだ

「・・・どうすんだ？これ・・・」

「先生・・・」

「！！」

しまった、近くには助けてくれた女性がいるのに思いっきり先生倒したぞ？

いつものパターンなら叫ぶか、泣くか・・・そんなところだろ

そう思っている時だった

――――パ～～～ポ～～～ン！！！

放送？それにしては、変な音だ
そう思っている時だ・・・目の前の景色が変わって行った
保健室の部屋の色は白だったのに・・・どんどん変わっていく
なんだなんだ！！

「・・・ラッキー！！」

変態教師が復活した
まるで、ゾンビのようによみがえり・・・

「くらえ！マジックバイス！！」

また、呪文みたいなことを言い出した
こんどは、光の色が違っていた、さっきは白に近い黄色だったのに、
今は完全な紫色だ
クソ！魔法陣が終わる前に逃げないと・・・と、考えていたが数秒
で魔法陣は完成して紫の光は俺の体に縄のように巻きついた

「クソ！！放せ！！」
「無駄無駄・・・さて・・・こんどこそ、ちゃんと見せてもらうぞ・
・・」
「やめてくれ！！！！！」

――――ブッチ！！

火事場の馬鹿力なのかな・・・簡単に縄を引きちぎることができた

「何！？」

「おらあああああ！！！！！！！」

勝った！！この距離なら、殴ってほうが速いはずだ！！

勝利に確信を得た俺であったが・・・

「マジックバイス！！」

別の方から声が聞こえた。その方向は助けてくれた女性の方ではなく、ドアの方であった

第二話（前書き）

今回も、城東拓己（じょうとうたくみ）視点です

第二話

【天神学園　魔法グラウンド】

「ぎゃあああああ！！！！！」

――――ドオオオン！！！

「あそこよ！！はやく仕留めないとほかのやつらに・・・」

「みつけた！！」

・・・なぜだ・・・

なぜ、こんな状況になっているんだ？

変態教師とのケンカから、三日しかたっていないのにもかかわらず

俺のは・・・

「拓巳は私たちのチームに入ってもらうわ！！」

ピンクの髪でのツインテール少女が言う。この子の名前は吉良愛美（きらあいみ）

三日前保健室に運んでくれた少女だ

それにまけじと

「いや、私たちの方に入ってもらうもん！！」

金髪でショートカットの少女も言う。ついでに、この子の名前は皆川七菜子（みながわななこ）。昔からの付き合いで、幼馴染みたいなものだ。年は俺より一つ下だけど・・・

「今日こそ、決めてもらうわよ。拓巳！！」
「どっちに入ってくれるの！？」
なぜ・・・こんなことになっているかと言うと話は三日前の保健室後からになる

【天神学園　校長室】

「あぶない。ところでしたね」
「ええ・・・おかげさまで」

あの、保健室で俺は校長先生の魔法？に助けられた
ただし、俺が勝利を確信したときに邪魔したのはこの人だが・・・
校長先生が、魔法であの変態教師を撃退してくれたおかげで俺は今ここにいる
ちょっと、服が焦げ付いているけど・・・

「すみませんねえ。何分こちらも歳なので」

そう言って、校長先生は重たい腰を椅子にかけた
確かにそうだろうな。見たところ校長先生の年齢は軽く６０は超えていそうだ
そのぐらい老けている

「さて、転入手続きしましょうか」
「そう言えば、あっているんですか？ここで」
さっきの変態教師は知らなかったみたいだけど・・・

「あっていますよ。あなたのお父さんに言われたから特別で、ですけどね」
「それもちょっとわからないんですよ。なんで親父が言ったから俺が・・・」

親父は神社の神主だ
俺も多分、後を継ぐことになる
神主は顔が広いけど・・・息子を転入させるほどの地位は持っていない
正直なところ戸惑っている

「あなたのお父さんのこと知っていないんですか？」
「親父のこと？ただの息子を溺愛していて、やさしい人ってしか知りませんけど」
「・・・じゃあ、話しますね。あなたのお父さんの学園でのこと・・・」

親父の学園？
親父この学園の生徒だったんだ
それは知らなかったな
だけど、何に関係あるんだ？
親父が学園のこと・・・

「まず、お父さんは学生の頃、お父さんは学園最強の魔法使いでした」
「へえ～～、親父がか・・・まじで！！？」
「はい。大まじです。歴代でも屈指の実力の持ち主で魔力も異常なほど高かったです」
「そうなのか・・・」

全然知らなかった
俺の前ではそんなこと一回も話していなかったのに・・・

「しかも、フラワーを3年の時に完全に使いこなしていましたからね」
「フラワー？なんですか、それ・・・」
「フラワーって言うのは、シードがスプライト、それからフラワーになったことです。まあ要するに種が芽になり、そして花になるそういうことだと思ってください」
「それはどういうものなんだ？シードは背中に何かあるみたいだけど」

変態教師が俺の服を破く口実にしていた
あの変態教師が言ったことが本当かどうかあやしいところだけどな・・・

「シードは背中に紋章があり、スプライトは何かの物体になります。フラワーは人によって変わるのでわかりませんが・・・」
「そうなんですか。わかりました」

どんどん変わっていくのか・・・

「何に使うんです？」
「魔法の補助ですね」
「補助？魔法を唱えるのに絶対必要とかじゃないんですか？」

漫画で出てくるのはそういうのが多い
だから、てっきりそう言うものだと思っていた

「一応、魔法は誰でも唱えることができます」

「俺でもか？」
「はい。でも、魔力がなければ魔法は不発となるのです。そして、その魔力を保存しておくためのがシードやスプライトなどなのです」
「なるほど、要するに魔力をためておくための物か」
「簡単に言うとそう言うものです」
「だけど、どうやって人を集めているんだ？新一年生が全員あるわけじゃないだろ？」

もし、そんなことなら世界的に有名になっているはずだ

「それは、こっちで魔法を使い極秘にやっていますので大丈夫ですね」
「・・・話は戻すけど俺が入って大丈夫なのか？多分シードとかそう言うのないと思いうんだが」
「大丈夫じゃありません。けど、あなたのお父さんの頼みですから頑張ってください」

・・・・とうさーーーーん！！！！！！
心の中で叫んだ
言ったよ！！この人言ったよ！！大丈夫じゃないって！！
絶対危険ジャン！！どうすんのおれ！？
いくらケンカが強いって言っても魔法でころされるよ？

「まあ、大前田先生に勝ったのですから大丈夫だとは、おもんですけ・・ど・・・」

後半自信なくなってきてませんか？校長！！

「まあ、保険はつけますので・・・」
「保険？」

「はい。保健室にいた生徒がいますでしょ？」
「ああ・・・ひったくりに会ったあいつか」
「あの人の名前は吉良愛美さんで去年一年生で一番の好成績を収めた人です」
「そうなのか・・・」
「だから、あの人のそばにいれば多分守ってくれますのであとは自分で何とかしてください！！！」
「はい！！？」

あれ！？
保険自分でなんとかしないといけないのか！？
ていうか！！校長！！元気でしょ！！
最後の方思いっきり大声になっていましたよ！！？

第三話（前書き）

今回も、城東拓己（じょうとうたくみ）視点です

第三話

【天神学園　廊下】

さて・・・どうする？
転入手続きを終えた俺は吉良さんに話しかけなければならない
しかし、俺はナンパ以外で女生徒話しかけたことはない
・・・正直ちょっとだけ苦手だ
だけどなあ、話しかけないと俺の命にかかわる！！
俺・・・死んでしまうのかぁ

「・・剣吾？」
「あ？」

・・・やべ、ちょっとケンカ腰になってしまったかも・・・
でも、そんな心配は無用だった

「て・・・七菜子？」
「うん！！」

元気のいい声で返してくる
七菜子・・・俺が小学校のころに俺のケンカに巻き込まれたところ
助けてそれからずっとついてきていた（校門がなぜか開いていて中
学生だった）
なぜ、いるんだ？

「なんでいるんだ？お前・・・」
「え？だって、私ここの生徒だよ？」

あ、そう言えば、こいつ俺より一個しただから今年から高校生か

「それより、いつから帰ってきていたの？剣吾」
「今日こっちに帰ってきて、転入手続きを終えたんだよ」
「え？じゃあ、今日からこの学校に一緒に通えるの！？」

こいつの家は俺の家、神社の近くあるから小学生の登校班は一緒だった
だけど・・俺は家に帰るつもりはない

「それは無理。俺は家に帰るつもりないからな」
「え～～～？なんで？」
「自分だけの力で生きたいんだよ」

正直なところなんの計画も立てていない
だけど・・・家に帰りたくない

「そうなんだ。残念」
「はいはい。じゃあな俺はちょっと用事があるから」
「用事？」
「ちょっと吉良って言う女子に用事がな・・・」
「七菜子も行く！！」
「・・・は？」

なぜ、こいつはいきなり大声を出したんだ？
周りの生徒達が変な視線を俺に向けている・・・
どうしてだ！！！

「あ・・・」

「お！」

不幸中の幸い！！！吉良さんを見つけた！！

だけど、どうすればいいんだ？

「あの・・大丈夫でしたか？」

「・・・何が？」

唐突すぎる質問に返す言葉が見つからない

「だって、さっき食らっていたでしょ？校長先生の魔法」

「ああ、そう言えばそうだったな」

そう言えば、こいつ俺のくらった現場見ていたんだっけな

でも、俺全然平気なんだけどな

「あと、ありがとうございます。強盗から荷物を奪い返してくれて」

「ああ、良いよ別に。俺は個人的に轢かれたから追いかけただけだからな」

「でも、よくあの状態で追いかけることができましたよね？魔法を使っている様子もなかったし」

「あれくらい、日常茶飯事だからな。慣れているよ」

「・・・剣吾、まだケンカしているの？」

・・・あちゃーーー

失敗したかも。基本的には優等生は不良が嫌う。もし、嫌われたら死ぬ！！

「ケンカ？何のことだ？俺は見ての通り品行方正な・・・」

「でも、お父さんから聞いたよ？退学になったって」

――――うおーーーい！！！！
知ってんジャン。なんで聞いたの！？
「退学・・・？どういうこと？」
やばい！！疑い始めた！！
ああ！！もう！！めんどい！！
「吉良！！ちょっとついてきてくれ！！」
「え・・？え？」
おれは、強引に吉良の手を引っ張ってこの場所から逃げ出した
後ろの方で七菜子が叫んでいたけど気にしない気にしない

【天神学園　校舎裏】

「何の用？場合によって死ぬわよ？」
・・・敵意むき出し！！死ぬ死ぬ！！
相手は学年で一番強い学生
俺はそこらへんにいる一般人Ａ
戦力の差はありすぎる！！
「ちょっと待ってくれ。何もしないから。ちょっとだけお願いがあるだけだから」
そう言った瞬間、また・・・放送が鳴り響いた
――――パ～～～ポ～～～ン！！！

「よっしゃ！！ナイスタイミング！！」

・・・ん？
後ろから声がした
そこには・・・
数十人の男子生徒がいる
あれ？ここって女子の比率の方がやたら多かったはずなんだけどな・・・

「なんのよう？」

全然吉良は答えていない
・・・おいおい、女子なんだからちょっとはビビれよ
ほんのちょっとそう思った

「やっとなんだよ・・・貴様を学年首位から引きずるにはこの力を使えばいいんだ！！！」

そう言って、もっていたガラスの球体を地面に叩き付けた
その瞬間、世界から色が・・・消えた
いや、モノクロの世界になった

「え・・？まさか・・・これは・・・」

吉良はどうようを隠しきれていない
なにがおきたんだ？
確かにビックリすることだけど・・・

「マジックアイテムの・・・マジガラ？」

「そうだ。お前を倒すためだけに発注したものだ」
へえ～～～魔法の道具ってどっかで作っているんだ
そんなのんきなことを考えていた

「マジガラの能力は数十秒間・・・魔法禁止だったわよね？」
「ああ・・・だから、この人数で割り続ければ・・・」
「！！」

・・・なるほど、確かに数分は何とかなるな
あれ？もしかして俺達ピンチか？

「そこの男！逃げたほうがいいぞ？今からその女を殺すからな」

そう言って、ナイフを取り出した
・・・あれーーーー？
俺、男子校に帰ってきた？
似たようなこと結構あったぞ？

「剣吾って言ったわね？あんた・・・」
「ん？そうだけど」
「にげて・・・お願い」

・・・泣きそうな顔になりながらも俺の心配をしてくれている
はあ～～～また・・・退学かな？俺・・・
おれはそう思った

「おい！！もし、その女の味方するなら、お前も・・・」
「はいはい。御託はいいからさっさと来い」

めんどくさそうな感じで言った
・・・そう言えば、昔、七菜子にそういう態度が男の人を苛立たせるって言っていたような
火に油を注ぐ・・・そんな感じの言葉が俺の脳裏によぎった

「わかった・・・殺してやるよ！！！」
「キャアアアア！！！」

ナイフを持った男が走ってくる
・・・はあ、俺以外なら対処に困るだろうな・・・
そう思いながら・・・俺はナイフを左手で対処しながら、右手で・・・
・

――――――ドゴッ！！

「ガ・・ハッ」
「え？」
「さて・・・次はどいつだ？さっさと来いよ」

俺は手招きしながらそう言った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2937ba/

Ｑ＆Ｃ　これが俺の学園生活！！

2012年1月14日07時45分発行